

【論文】

国際生糸市場再編下の江浙生糸市場  
—1870～90年代—

楊 櫻\*

国際生糸市場重组之下 :19 世紀 70—90 年代的江浙生糸市場

YANG, Ying

要約：本稿は江浙在来糸の輸出価格が下落・低迷した 1870 年代後半から 1890 年代前半までを対象とし、生糸の流通機構の実態と、それに規定された世界市場への包摂の過程を検討する。1870 年代後半以降、上海の輸出価格はロンドンの糸価に規定されるようになり、世界市場への統合が開港場上海に及んだ。しかし、この時期の内地市場における糸価は、上海価格と連動せず、国際市場から相対的に自立性を維持していた。その要因は、国際市場から独立した国内生糸市場の存在とともに、当時の内地市場の構造が関係している。この時期の中国の流通機構は伝統的な非組織的性格をかなり維持しており、それが世界市場への包摂を開港場のみに限定し、内地市場の掌握を阻んでいたのである。

キーワード：生糸 開港 流通 糸行 業規

はじめに

かつてアヘン戦争以後中国は半植民地に転落したとし、中国市場の世界市場への包摂は開港と直結されてきた。宮田道昭氏はこれを批判し、開港場の外国貿易ギルドを頂点とし末端の消費者・生産者にいたる一連のギル

---

\*よう えい 文教大学文学部中国語中国文学科 非常勤講師

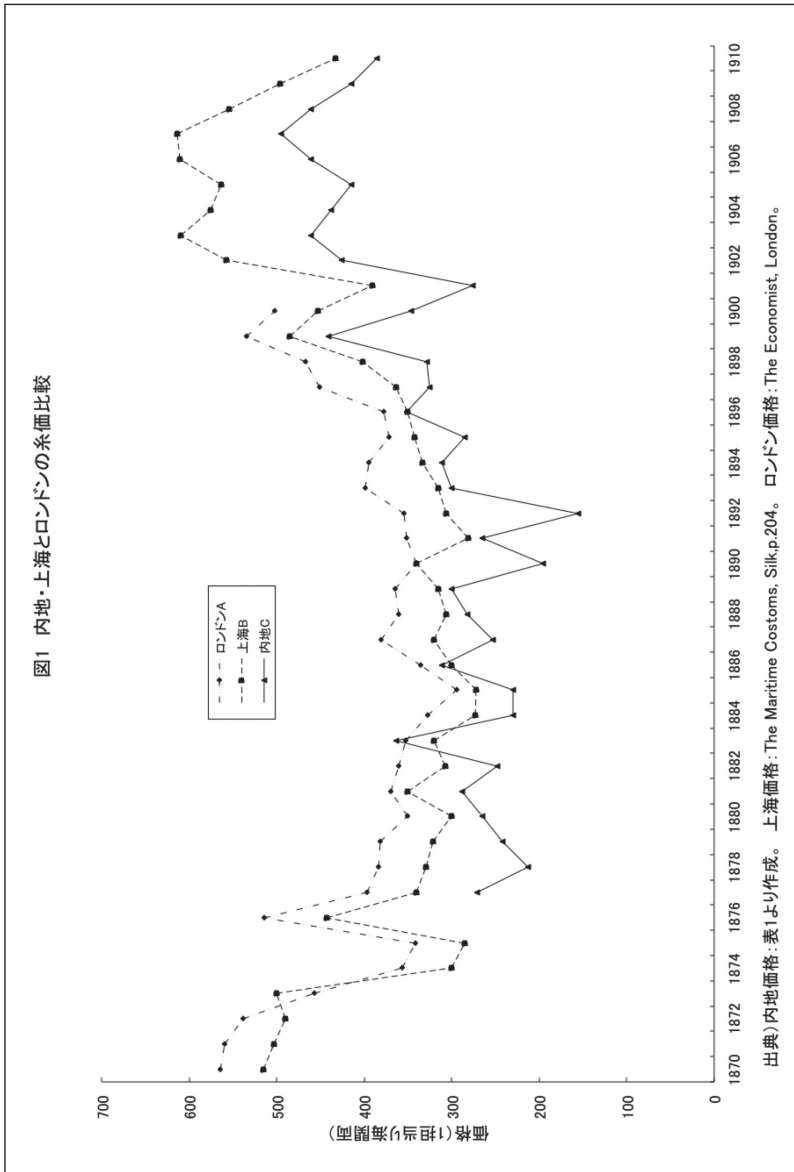
ド体制が世界経済への包摂を阻んできたが、1880年代に「交通革命」がそれを動揺させ、中国は1890年代以降に国際分業体制に組み込まれていったとする<sup>1)</sup>。これに対して呉承明氏は、旧来の「半植民地半封建社会」論を修正し、金融的手段を通して垂直的に組織されていた流通機構を掌握することによって、世界資本主義は1870年代以降に中国の農業を包摂した、と論じた<sup>2)</sup>。しかし、これらの研究は、包摂如何についての具体的な検討を行っておらず、世界市場への包摂の過程を解明する作業は課題として残されている。また、対立する宮田氏と呉氏の見解も、実はともに中国内の流通機構が組織化されており、商人資本による市場支配がなされているという暗黙の前提に立っており、肝心の流通機構の実態については実証されていない。1990年代以降、ヨーロッパや日本とは異質な、中国の非閉鎖的・非固定的な前近代社会や市場構造が注目されてきた<sup>3)</sup>。近代の流通機構の実態や世界市場への包摂の過程についても、それらを視野に入れて分析されねばならない。

筆者はかつて長江下流域に位置する江蘇・浙江両省の在来手繰り生糸の流通を素材に、アヘン戦争後の1843年に上海が開港されてから、ヨーロッパで恐慌が起こった1873年までを対象とし、生糸貿易の構造と中国糸商の取引活動を論じた。上海開港や50年代以後の貿易の増加は、直ちに中国経済の世界市場への包摂をもたらしたのではなく、生糸貿易は国内市場に強く規定されており、むしろ上海の価格がロンドンの糸価を規定しさえしていたのである<sup>4)</sup>。本稿では、生糸価格が下落・低迷した1870年代後半から1890年代前半までの時期を検討する。第1節では、蚕糸市場の統合状況を示す指標とも言うべき生糸価格の動向を把握し、第2節では、そうした現象の流通的背景について考察を行う。

## 第1節 1870～1890年代における生糸価格の動向

### 1 開港場上海の糸価動向

図1のグラフA・Bはそれぞれロンドン市場での中国糸の価格と上海に



おける生糸輸出価格を図示したものである。グラフBにより、1870年代から90年代末に至る上海糸価の動きを追ってみると、次のようになるであろう。1870年代初めまで高水準を保っていた生糸価格は、1874年から低落し、1876年以降は長期の停滞期に入る。80年代半ばに底に達した糸価は、以後90年代始めに至るまで、ほぼ横ばい状態を続けるが、90年代半ば頃からはかすかに、90年代末からは相当顕著に、上昇の動きを見せている。1870年代後半～90年代前半は、輸出価格の低落・停滞の時期であったといえよう。

こうした中国糸の輸出価格の低落は、いかなる背景のもとにおこったのか。まず第1に指摘しなければならないことは、生糸供給国の多様化である。1869年にはヨーロッパの蚕病は克服され、良質のイタリア糸の生産が急速に回復した。また同じアジアの日本の安価な生糸も世界市場に急速に出現したため、ヨーロッパの絹織業は1850年代から60年代末までのようにその原料糸の大部分を江浙糸に依存する状況は、かなり改善できるようになった。第2には、運輸・通信条件の改善である。1869年のスエズ運河の開通はヨーロッパとアジアの距離を格段に短縮し、1871年の上海・ロンドン間の電信網の成立が商取引における電信の利用を可能にし、注文・委託に基づく手数料取引を発達させた。こうした中で、生糸の輸出価格は次第に需要側の諸条件によって決定されるようになった。

1873年恐慌を転換点として、ヨーロッパ市場が大不況期に入ると、生糸価格は下落傾向に転じた。翌74年には、上海での取引価格は、優等品が70年代初頭の三分の二の価格にまで、中下級品は同じく二分の一の価格にまで、それぞれ低落した<sup>5)</sup>。この相場は太平天国の戦火が蚕糸地域に及ぶ前のそれとほぼ見合うものであり、江浙在来糸の上海取引価格は、1874年の価格低下により、ほぼ1840年代後半から1850年代前半の水準へと大きく後退したのであった。

1880年頃に至ると、ヨーロッパの物価水準は底入れの気配をみせ、生糸価格も1881年の新糸期直前から激しく反騰した。しかし1882年1月、フランス恐慌が勃発して生糸価格は暴落し、ヨーロッパ市場は大不況期におい

て最も深刻な不況に突入する。リヨンの絹織業生産は1885年まで減少し<sup>6)</sup>、国際生糸価格も1885年11月まで低落を続け、上海市場もこれに連動した。それ以降、輸出価格は若干持ち直したが、1890年代前半までには低い水準のまま横ばい圏内で推移している。

こうした中、1882年には、外国商人に対して中国商人が売り値を吊り上げようとする動きが起こってくる。新糸の入荷を迎えた6月には生産高が平均を下回ることが予想され、またイタリアの生糸生産が不調と伝えられたため、上海市場の生糸価格は1881年に続き高騰し、中国商人は内地からの買入れに高値を付けた。左宗棠のプレーンとして洋務運動にも深く参画していた当時の中国で最有力の金融業者でもある胡光墉が、巨額の資金を投入して大量の生糸を買い占め、生糸の売込価格を人為的に吊り上げようと図った<sup>7)</sup>。しかし、新糸が中国内地から上海に到着したとき、売行きは思わしくなく、しかもイタリア生糸が豊作であると判明したため、外国商人はこれによって必要量が満たされると判断し、胡の1万4千包に及ぶストックに手をつけなかった。何ヶ月もの間、胡は値下げをせず、外国商人も買控えたため、膨大な在荷が年明けに持ち越された。しかし結局、金融逼迫のため、胡は10月になって手持ちの生糸を放出せざるをえず、生糸価格は急落した。損失額は150万両にのぼり、外国商人に対抗する胡の試みは無惨な失敗に終わった<sup>8)</sup>。胡光墉の破産は、中国の一富豪の失敗物語であるだけでなく、江浙在来糸をめぐる新たな市場環境のなかで、開港場上海における生糸輸出価格が、海外市況の影響下に形成されていたことを、明確に示すものだったのである。図1からも見てとれるように、1874年以降、変動幅も含めて上海価格はロンドン価格とほとんど同調して推移しており、相関係数も0.94と高い水準になっている。上海の輸出価格がロンドンの糸価に規定されるようになり、その意味では世界市場への統合が開港場上海に及んだことになる。

## 2 内地における生糸価格の動向

中国においては、開港場などをのぞき、内地での長期の物価動向を伝えてくれる資料は極めて少ない。生糸の価格に関しては、ややその動きを窺わせるものとして、蘇州織造及び杭州織造の奏摺に見られる織造局の生糸採買価格がある。この採買は主に蚕糸業の中心たる浙江省湖州府の南潯鎮・雙林鎮・新市鎮等で行われたものであり、従って、採買価格の変動は、一定程度産地における生糸価格の変動傾向を反映していると想定し得る。1884年1月付けの奏摺は、次のように記している。

市場較之同治初年、遂漸遞減。然与道光咸豐年間、尚多軒輊<sup>9)</sup>。

この史料の記述から、産地糸価が同治年間(1862~74)初頭より若干の下落はあるものの、価格の底である道光・咸豐年間(1821~61)に比べてなおかなりの価格差が存在したことが察せられる。他方、先にも述べたように、上海における生糸の価格は、1874年より、ほぼ1840年代後半から1850年代前半の価格水準へと後退し、1880年代半ばには最低価格での横ばい状態が続いている。つまり、生糸は内地市場での下落が相対的に小さく、上海市場ほどには低下しなかったのである。

官による報告と並んで、内地糸価の動向を多少とも連続的に示すものとして、現在のところ得られるものは、上海の新聞『申報』に記載された生糸価格のデータである。表1は、『申報』の各号から各年の内地糸価を抽出したものであり、地域は蘇州・杭州・鎮江及び南京を対象とし<sup>10)</sup>、時期は1877年から1910年までをカバーしている。『申報』の糸価記事は、同じ地点について長年に亘って連続して残っているわけではなく、統計学的には不完全である。しかし変化の傾向、概略と特徴的な動きを示しており、値動きを規定した諸条件に関する記述資料と突きあわせるなら、現象を読み取ることは可能であろう。

糸価資料がどのような性格の市場で採訪されたかに関して、例えば『申報』1896年6月23日「糸市統聞」は、次のように述べている。

杭州新糸上市、於四月二十日開秤。肥糸定価每両二百五十文、細糸每

百両洋二十七元。

ここから、これらの価格は糸行（生糸問屋）が糸市で生糸を買付ける際の価格であったこと、即ち、報じられる価格は農家の庭先価格ではなく、糸行の存在する杭州など地方都市の価格であったことが分かる。また、同じ史料により、これらの糸価は収穫期の市場価格であったことを知り得る。

糸価動向を視覚化するため、表1の数値をグラフCとして図1に示した。図1のB・Cを比較して見ると、内地の価格の変動がより激しく、また内地の上昇に対して、上海の低落という形で、両者が逆方向に変動した時期が多く存在することがわかる。1883年についてみると、蘇州と杭州織造の奏摺は、前引の「市場較之同治初年遂漸遞減」云々の文に続けて、

本年蚕多受傷、糸収大減、価因之増。雪白經糸每両銀三錢一分六厘三毫。亮白緯糸每両二錢九分四厘九毫。

と述べ、83年には凶作のため糸価が騰貴し、上質経糸（細糸）の価格が一両につき約銀三錢になったことを記している。この数字により推算すると、83年の細糸の産地仕入れ価格は1担当あたり約506両となる<sup>11)</sup>。この時最上等の生糸の輸出価格は440両であるから<sup>12)</sup>、産地・上海間の逆鞘が見られる。また、同年、日本在上海領事館の報告にも、

近日湖州ノ糸価大ニ騰貴シ、開市ノ日ニ目方百両ニ付洋銀三十元ナリシ、玉峯印ハ三十三元トナリ、一割程ノ上向ナリ。郷中ニテハ多ク粗糸ヲ造リ、市上ニテハ細糸ノ不景氣甚シキヲ以テ、郷中ニ往テ粗糸ヲ買フ者先ヲ争フ姿アリテ、前ニ比スレハ市面稍盛也<sup>13)</sup>。

とある如く、産地糸価の上昇は指摘されている。

上海市場に目を移せば、これらの報告の書かれた1883年という年は、82年のフランス恐慌の発生によって、ヨーロッパからの生糸需要が落ち込んだ年である。加えて、外国商人は胡光墉の売り残しの多さにつけこみ、大量の在庫を抱えて上海市場はいずれ下がらざるを得ないと踏んで、一向に買おうとしない。産地で生糸商人が買い取った新糸が上海に到着し出すと、生糸を買い進む者もなく、市場は沈滞傾向を示したのである。『申報』は、

表1 内地における銅糸価格

年次	地域	価格	備考	年次	地域	価格	備考
1877	蘇州	21~26 <sup>1)</sup>		1894	杭州	[27000] <sup>23)</sup> ~[30000] <sup>24)</sup>	
1878	蘇州	15 <sup>2)</sup> ~22 <sup>3)</sup>		1895	杭州	23.5 <sup>25)</sup> ~26 <sup>26)</sup>	
1879	蘇州	18~24 <sup>4)</sup>		1896	杭州	28 <sup>27)</sup> ~33 <sup>28)</sup>	
1880	蘇州	20 <sup>5)</sup> ~26 <sup>6)</sup>		1897	杭州	[26500]~[30500] <sup>29)</sup>	1ドル=1010文
1881	蘇州	25 <sup>7)</sup>		1898	杭州	27 <sup>30)</sup> ~30 <sup>31)</sup>	1ドル=1070文 <sup>32)</sup>
1882	蘇州	21~22 <sup>8)</sup>		1899	杭州	[40000]~[42000] <sup>33)</sup>	
1883	湖州	30 <sup>9)</sup> ~33 <sup>10)</sup>		1900	鎮江	26 <sup>34)</sup> ~34 <sup>35)</sup>	
1884	蘇州	20 <sup>11)</sup>		1901	南京	24 <sup>36)</sup>	
1885	蘇州	20 <sup>12)</sup>		1902	南京	34~40 <sup>37)</sup>	
1886	蘇州	25~29 <sup>13)</sup>		1903	鎮江	38~42 <sup>38)</sup>	
1887	蘇州	20~24 <sup>13)</sup>	杭州市価22.5 <sup>14)</sup>	1904	鎮江	36 <sup>39)</sup>	
1888	杭州	23 <sup>15)</sup> ~26 <sup>16)</sup>	南京17~24 <sup>18)</sup>	1905	鎮江	36 <sup>40)</sup>	
1889	杭州	[28000] <sup>17)</sup>		1906	鎮江	38~42 <sup>41)</sup>	
1890	南京	17 <sup>18)</sup>		1907	鎮江	43 <sup>42)</sup>	
1891	杭州	23 <sup>20)</sup>		1908	鎮江	40 <sup>43)</sup>	
1892	杭州	[14000] <sup>21)</sup>		1909	鎮江	[38000] <sup>44)</sup>	
1893	杭州	[28000] <sup>22)</sup>		1910	鎮江	32~35 <sup>45)</sup>	

1) 1877年6月12日。2) 1878年6月25日。3) 1878年6月15日。4) 1879年6月6日。5) 1880年6月10日。6) 1880年6月16日。7) 1881年6月11日。8) 1882年6月10日。9) 「清糸景況第三報」『通商彙纂』1883年上半季。10) 「清糸景況第四報」『通商彙纂』1883年上半季。11) 1884年6月12日。12) 1885年6月21日。13) 1887年7月2日。14) 1887年5月31日。15) 1888年6月5日。16) 1888年6月10日。17) 1889年5月30日。18) 1889年6月18日。19) 1890年6月17日。20) 1891年6月1日。21) 1892年6月6日。22) 1893年6月6日。23) 1894年5月31日。24) 1894年6月10日。25) 1895年6月14日。26) 1895年7月18日。27) 1896年6月8日。28) 1896年7月3日。29) 1897年6月27日。30) 1898年6月3日。31) 1898年7月9日。32) 1898年6月7日。33) 1899年6月1日。34) 1900年6月3日。35) 1900年6月9日。36) 1901年6月17日。37) 1902年5月17日。38) 1903年6月11日。39) 1904年6月6日。40) 1905年7月21日。41) 1906年6月8日。42) 1907年6月1日。43) 1908年6月16日。44) 1909年6月9日。45) 1910年6月2日。

表の数値は、生糸百両当りの銅建価格をドル単位で示したものである。( )内の数値は、銅銭表示の価格。]同年の複数の価格が載せられている場合は、原則として、最高価格と最低価格のみを示した。ただし1883年については「申報」でデータが揃わないため、『通商彙纂』により補った。



この不況の原因を「上海での生糸相場下落に比べて、産地での価格が高すぎる」と分析している。さらに、『申報』は、当年の中国糸商の状況を「如此絲業諸人又将何以求利」と嘆いている<sup>14)</sup>。

このように、1870年代中期以降、国際交易体制の整備により上海相場が国際相場に従属するようになったが、内地市場の自立はなお基本的に継続した。事実、1877年から1898年の時期の相関係数も0.15と、二つの変数間には殆ど相関が認められない。これは、この時期の内地相場が開港場上海の相場から独立していた度合いが強いことを示唆している。

### 3 国内絹織業と生糸需要

内地の自立的動きは、どのような要因によって規定されるものなのか。前掲の日本領事の報告では、細糸需要の低さに対比して、粗糸需要の高まりが産地相場を押し上げる要因になっていたことが示唆されている。以下、主に国内市場の需要との関連で内地の糸価動向を位置づけてみたい。

まず、生糸の種類について述べよう。在来製糸法によって生産された江浙糸は、糸筋の太さによって細糸と粗糸（肥糸）の二つに大別された。細糸は一般に上質の繭から造られる細い糸で、輸出のほか、絹織物の経糸として多く用いられた。粗糸は上繭・中繭から造られるものであり、専ら織物の横糸として使用される。細糸は粗糸に比して、品質・価格等の面において勝っているが、生産性の面では劣っている。後に引く領事報告にもあるように、1人当り1日の繰糸量にして、細糸は粗糸の三分の一でしかなかった。繭の収穫後、蛾の出るまでの十数日の内に生繭から生糸をとらなければならなかったため、細糸の繰糸工程においては雇用労働を用いることが一般的であった。春繭の収穫と在来糸の生産時期は、前に麦刈り、すぐ後に田植えの作業を控えていたため、農家にとって極めて多忙であった。このためにこの時期の労賃はかなり高いものになっており、家族外の労働力によって細糸を生産しようとするれば、よほど好条件を提示しなければならなかった。同治7年（1868）刊『長興県志』巻八、蚕桑に、

邑中向祇做両緒粗糸、近因粗糸与細糸価甚懸絶（夷商只収細糸）、遂皆做細糸。雇人做糸、一日須工価錢六百文。或有先来相助育蚕者、謂之蚕忙、工価亦甚昂。

とあって、高い労賃であるにも拘らず、細糸価格の騰貴率が粗糸のそれをかなり上回っていたため、湖州府長興県では粗糸から細糸への生産転換が進んだことを述べている。しかし、細糸にとって有利なこのような状況は、80年代に至って変化した。1883年の日本領事の商況報告では、次のように言っている。

湖州ノ四郷ハ最モ細キ糸ヲ出シ價モ亦独貴カリシカ、年来細糸ノ捌ケ口滞リ、粗糸反テ捌ケ好ク、下等細糸ト上等粗糸價稍相等キニ至レリ、盖細糸ハ三日ニシテ一車ヲ得、粗糸ハ一日ニシテ一車ヲ得ヘシ、又日数ヲ経ル間ニ繭ノ蛾ヲ出ス恐レモ有ル故其職工ヲ雇フニハ頗ル過分ノ費用ヲ出サルヲ得ス、然ルニ粗糸ノ價細糸ニ劣ラス、捌ケ方モ反テ速カナルヲ以テ今年ハ各郷ニテ争テ粗糸ヲ作り、往時ヨリモ数倍ノ多キニ至レリ<sup>15)</sup>。

粗糸と細糸の間にそれほど差がないため、湖州では、再び細糸から粗糸への転換が行われたことを述べている。つまり、同治期と光緒期の二つの時期の大きな条件の違いは、産地における細糸とその競合物である粗糸の収益性の変化である。同治期は細糸価格が粗糸をかなり上回っており、そのため農民は細糸生産を選択したのであるが、恐慌を契機とする欧州生糸市場の縮小がその収益性を悪化させたのに対し、粗糸は国内市場の需要をうけて安定した利益をあげていたのである。

それでは、この時期の国内絹織業からの生糸需要はどのような状況であったのであろうか。次に紹介するのは、中国生糸の輸出不振を伝える史料であるが、そこには国内絹織業の影響が見られる。19世紀後半の主要な輸出品であった在来白糸の輸出額のみについて見ると、1880年代から減少が見られ、90年代前半には一時的に増加に転じているが、後半以降は長期の減少傾向を示している。この輸出不振について、1886年の海関報告には、

生糸供給不足の現象については、別の方面から解釈を加えなければならぬ。少なくとも一部は中国の絹織物に対する需要が増加したことによる。絹織物の輸出量は増加しつつあり、過去十年間でほぼ二倍に達した。このことから、中国国内の絹織業者が需要する生糸はますます多くなるために、外国市場に供給する生糸はますます少なくなると断言できよう<sup>16)</sup>。

とあり、絹織物の輸出が拡大したため、国内生糸需要が増加したことによるものとされている。ある推計によれば、1880～94年の中国の絹織物の輸出量は以前の2倍に相当する急成長を示した<sup>17)</sup>。『中国実業志』、第8編は、光緒年間(1875～1908)前半の事情を次のように述べている。

考鎮江綢品、由来已久。初名綾縐。前清光緒間(甲午前)、為該業最盛時代。有三千余機。出品以披風為最盛、約一丈余長、多銷朝鮮。綾縐綾紬盛時、行銷兩湖、北五省及東三省、亦甚多。共年値三百万兩<sup>18)</sup>。

鎮江市場は国内各省と朝鮮への絹布輸出の増大で好況を呈し、披風を中心とした絹織物の生産が最盛期を迎えたことを指摘している。この記事も、国内の生糸需要の増大を示しているといえよう。

ところで1860年代後半以降には、湖州や嘉興・杭州・蘇州など伝統的な蚕業地以外にも、新たに蚕糸を営む地方が登場するようになった。1870年代末には、江蘇省内の太湖と長江に挟まれた地域では無錫が、浙江省内の錢塘江以南の地域では紹興などが、それぞれ生糸の新たな産地として知られるようになった。ここで注目されるべき点は、これら新興蚕業地での生糸生産と絹織業が極めて密接な関係にあったことである。まず、後に優良繭の産地として知られる紹興についてみよう。

元来紹興府下一帯ノ養蚕業ハ其創始遠キニ非ズ今ヨリ三十五年前長髮賊ノ乱アリテ古来養蚕業ヲ以テ有名ナル杭州・湖州・嘉興地方ヲ蹂躪スルニ当リ其地ノ人民ハ多々四散シ嗣テ紹興府下ニ流寓スルモノ尠ナカラズ乱定マルノ後ト雖モ終ニ郷里ニ帰ルヲ得ズ因テ初メテ其地ニ於テ養蚕業ヲ行ヘリ之ヨリ相傳ヘテ以テ当今ノ如ク全ク一ノ養蚕地ト變

ゼリ蕭山地方モ亦然リトス然レモ其製成シタル生糸ハ悉ク支那絹ノ織糸ニシテ未ダ曾テ欧米地方へ輸出スル如キ生糸ヲ製シタルコトナシ<sup>19)</sup>。太平天国の時期に杭州・湖州・嘉興などの地方の人々が流入してきたことを契機に蚕糸業が発展したこと、そして、この地域で生産された生糸はすべて国内絹織業の原料生糸として消費されていたことがわかる。また、後に最大の繭産地として成長した無錫では、

向年無錫金匱両県、飼蚕之家不多。自經兵燹以来、該処荒田隙地、尽栽桑樹。由是飼蚕者日多一日、而出糸者亦年盛一年<sup>20)</sup>。

とある如く、80年代の観察でも、やはり蚕糸生産の拡大が指摘されているのである。また、1881年刊行の海関の特別報告によれば、無錫糸の6割は絹織業の原料糸（緯糸）として国内需要があったのである<sup>21)</sup>。このように無錫・紹興などの地方では、1860年代の後半頃から蚕糸業が普及し始めたが、80年代に入って原料糸産地として本格的に成長し、国内絹織業との関係が強かった。

以上のように、1870年代後半から90年代前半にかけて、上海の生糸相場は世界市況に従い下落・停滞した。他方、絹布市場の好況のため国内の生糸需要は高まっており、内地の生糸相場を押し上げていた。このため、かつて高価格に促されて大量に開港場上海へ流れ込んでいた生糸は、その行先を国内市場へ転換したのである。以下、第2節では、このような生糸貿易の構造と生糸商人の活動との関連を検討していくことにする。

## 第2節 地方同業団体の業規による同業規制とその限界

### 1 地方生糸商人の動向

江浙地方の在来糸は、農民から産地の糸行によって買い付けられ、開港場の糸棧を仲介にして外商に販売されていた。生産地で客商の生糸を委託買付する糸行（牙行）、生産地から生糸を輸送していく地方生糸商人（客商）、そして上海で地方生糸商人の生糸を委託売込する糸棧（牙行）という客商・牙行体制が開港以前から存在していた。こうした動きに加えて、産

地の糸行が上海に代理人を送って売込を行ったり、または上海の糸棧が代理人を産地に送って買付を行ったりするような形態も広がっていった。開港直後上海へ生糸を出荷した地方生糸商人の多くは、湖州の出身者であった。その取引方法は譲渡利潤の獲得を目指した自己勘定による買取取引の形を取った。1850年代、1860年代においては、湖州商人が産地での仕入れ価格と上海での売込価格の差額を利用して、巨大な富を築いていった。

湖州商人の成長の背景には、太平天国期の高リスク・高リターンの構造があったが、ここでは、湖州商人が生糸売買で成功した理由として、彼らが享受できた情報という側面も指摘したい。五港開港後まもなく、上海には生糸の売込にあたる糸棧が出現した。糸棧は当初広東出身の商人などが開設したが、まもなくその開設者の多くは、主産地である湖州府出身の商人によって占められるようになった。糸棧には糸通事が雇用されており、彼らが外国商社への生糸の売込業務を行っていた。外国商社で糸通事を相手に生糸の買入れを行うのは、同じく湖州出身の糸買弁であり、糸棧の経営者・糸通事と外国商社の糸買弁とは、出身地や扱う商品が同一のこともあってお互いに密接な関係にあった。彼らのもつ上海情報は地方生糸商人の買付けにとっては重要な意味を持っていた。というのは、産地で生糸を買付ける商人は、産地の価格動向と同時に、上海の価格動向にも目配りをする必要があったからである。一般の商人や生産者よりも一日早く上海の糸価の上昇を知ることができれば、大量の生糸を安価なうちに買い占めて巨利を博することができるし、糸価の下落を一日早く知ることができれば、買付を中止して損失を少なくすることができるというわけである。上海市場と密接な連携を保ちながら生糸輸出に携わってきた湖州商人の強みは、こうしたところで発揮されたはずである。

ところが1871年代前後にかけて、ロンドン・上海間の電信線が開通するとともに、上海での日々の生糸取引の状況は新聞紙上にはほぼ全面的に公開されるようになった。どこの生糸売込問屋から、どの荷主の生糸が、何個、いくらで、どの輸出商に売り込まれたかということは、翌日の新聞、例え

ば同治11年3月23日(1872年4月30日)創刊の『申報』などを見ればたちどころに判明するのである。その意味で上海市場は極めて公開度の高い透明な性格をもつようになり、上海市場と密接な連携を保ちながら生糸輸出に携わってきた湖州商人の情報「独占」的地位を掘り崩すこととなった。中国全体の生糸輸出に占める湖州の割合は、1847年までは63%強と圧倒的であるが、1880年には7.9%にまで減少し、輸出貿易に占める湖州の優位が失われていたことが判明する<sup>22)</sup>。いまや生糸取引をめぐる中国商相互間の競争が、一層激しくなっていたことが窺えよう。

取引情報の公開が産地と上海をつなぐ地方生糸商人の活動にもたらした影響についての認識は、『申報』の論説上で示されている。ある論説は、激しく変動する国際的な相場が電信によって伝達され、中国商相互間の競争による買い値の引き上げ、売り値の引き下げ、それに中国商の損失といった事態が出現したと述べている<sup>23)</sup>。1879年の新糸の買付時期に、ヨーロッパの生糸生産の不調が伝えられたため、中国商人は一斉に産地に入り輸出生糸の買付を大量に増やした。その結果、1879年の産地は、全体として豊作であったにもかかわらず買付価格ははねあがった。一方、同年の上海には、着荷の多さによって生糸相場は下落し、中国商人は安値での売り急ぎに走らざるを得なかった。同様な行為の続発を防ぐ目的で、一部の糸商は1879年10月7日付けの『申報』に広告を載せ、商人全体に対して競争買を抑え、上海での多数の在庫保持を回避しようと呼びかけた<sup>24)</sup>。

これより先、1876年には、異常気象でイタリアの繭が大減収になり、1874年から下落を続けた上海生糸相場は、6月を迎えて上昇し始め、同年10月末まで相場の高騰が続いた。この当時は、上海に拠点を持つ糸棧は、委託販売経営確立後も生糸買付を実施しつづけた。かつて産地買付に活躍した南潯鎮きっての生糸商人劉鏞は、6・7月に低価格の生糸を大量に買占め、9月にまとめて売込むことで利益を得たが、その後も糸価が暴騰しつづけるので、人にあざ笑われたという。しかし11月に入ると生糸価格は一気に下落し、劉鏞を嘲笑した商人らは手持糸の暴落で大きな痛手を受けた<sup>25)</sup>。

産地から上海へ生糸を持ち出しさえすれば、必ず何倍以上に売れたというのは開港直後に限られた話であり、産地価格と上海価格が接近してくる条件の下で、地方生糸商人が自己勘定による買取方法で利益を求めようとするれば、絶えず上下する生糸価格の動きに着目し、低価格の際に買占めた生糸を価格が上がるまで持ちこたえ、価格高騰のピークと思われる瞬間に売却するほかはなかったのである。劉鏞といえども採用した方式はまさにそれであった。その取引方法の危険性について、1892年1月26日付『申報』「辛卯年上海市面」は、次のように述べている。

自春徂冬、行情竟無上落。業此者雖不致有虧損、而座耗利息、已非輕淺。老於絲業者謂、今年通盤核算、每包須耗至十一十二兩。則所傷亦不貲矣。推其故、皆緣申地之行情未大、而內地之抄価已高。正如俗語做帽候頭大。頭之大不知何時、而帽則已成陳物。如此做法、又安得有賺。ここには、春から下落を続けた生糸相場は年末を迎えても上昇せず、販売時間が長引くことにより、生糸をストックとしておくコストが増大し、その結果、多大の損失を受けたと書かれている。また、俗に「做帽候頭大」と呼ばれる単純な買占めが利潤確保を危うくする懸念も表明されている。つまり、単純な買占めは極めて不安定な取引形態であり、そのため、地方生糸商人が成長していくためには、こうした危険性の高い経営形態を変えていく必要があった<sup>26)</sup>。

以上、地方生糸商人について検討してきたが、高糸価時代の終息、そして電信・新聞の普及に伴う情報の公開が、流通過程の利潤を圧迫してその合理化を迫ったのである。

## 2 業規による同業規制の試みと挫折

内地における生糸の流通機構に目を転じてみよう。咸豊『南潯鎮志』巻24、物産に、

其糸行有招接廣東商人及載往上海与夷商交易者、曰廣行、亦曰客行。専売郷糸者、曰郷糸行。買經造經者、曰經行。別有小行、買之以餉大

行、曰劃莊。更有招鄉糸代為之售、稍抽微利、曰小領頭、俗呼白拉主人、鎮人大半衣食於此。

と述べられているように、開港直後の南潯鎮では、生糸取引に従事する商人として①客行(広行)、②郷糸行、③経糸行、④小行、⑤小領頭(白拉主人)の五種類が存在した。客行は、生糸を転出するために広東商人と取引し、また上海に赴いて外国商社とも取引する糸行である。つまり、客行は外来の商人の委託を受けて買付にあたり手数料を取得する委託問屋であるだけでなく、自己の計算と名義で生糸の売買にあたる独立の商人でもある。客行に対して、郷糸行は域内を中心に流通する郷糸を取扱う。また、経糸行は経糸を買付けたり、原料細糸を農民に貸与して撚糸させたりする糸行のことである。一方、小行は、直接生産者より生糸を取買して大行=有力糸行に買い取らせる集荷業務を行っており、「劃莊」と呼ばれていた。小領頭或いは白拉主人と呼ばれる仲介者は、生糸の売り手を糸行に案内して手数料を受け取っており、南潯鎮の住人の多くがこれに従事していたといわれている。

有力糸行が問屋の機能を有し、小行を通して生糸を集積していたことは、以上の資料からは確認できる。しかし、生糸は小行→有力糸行という経路を辿って流通し、小行が有力糸行の大資本の下で従属していたと見ることは早計である。光緒『菱湖鎮志』巻11、物産、には、『南潯鎮志』と類似の文章が掲載されているが、それによると南潯と並ぶ湖糸の一大産地たる菱湖鎮では、①郷糸を買付けて上海の外国商社に転売する「糸行」、②在地で郷糸を買付けて大行や客商に販売する「小行」、③「小領頭」(白拉主人)の三種類の業者が存在していた<sup>27)</sup>。有力糸行のために取買業務を担う小行の経営は、南潯鎮では「劃莊」、菱湖鎮では「鈔莊」と呼ばれており、彼らから直接遠隔地交易商人である客商に生糸が販売されていたことに留意しておきたい。このような事例からすると、小行と有力糸行の間に従属関係が存在したとは考え難い。

ところで糸行は手数料の取得を目的とし代客売買を営業とする者であり、



従って原則として、官府より牙帖と呼ばれる許可証の頒給を受けて毎年牙税を納付する、牙行でなければならぬ。しかし、産地糸行については、次のような状況が一般に指摘されている。

然レドモ、内地ニテ生糸即チ支那養蚕家ノ繰糸セル座繰糸ヲ売買スルモノハ、単ニ部帖ヲ領由セルモノノミニ限ラザルガ如シ。現今内地ニ於ケル實際ノ模様ヲ見ルニ、部帖ナクシテ生糸ノ買入所ヲ開設シ、公然称シテ自ラ糸行ト云フモノモアリ。蓋シ近代支那ノ各制度弛ミシ結果トシテ、部帖領有ノコトモ一々之ヲ生糸ノ商人ニ強フル能ハズ。牙帖アリテ開行スルモノ素トヨリ法律上ノ規定ニ従ヒ行家トシテノ營業ハ自由ニ之ヲ為シ得ルハ勿論ナルベケレドモ、仮令部帖ナクシテ生糸ノ買入所ヲ開設シ農家ノ持參セル生糸ヲ買込ムニ於テハ、何等法律上ノ問題トナラズ<sup>28)</sup>。

つまり、国家から牙帖を頒給されずに仲介業務を私的に営む糸行も数多く存在したのである。

すでに指摘したように、1870年代後半以降、高糸価時代の終息、そして情報の公開に伴う地方商人間の競争が、流通過程の利潤を圧迫した。湖州で買付開始日の統一化が協議されたのは、まさにこの時期であった。1880年5月19日付けの『申報』は、「整頓糸市」と題して、次のように述べている。

杭嘉湖糸業、近年來、各糸客心性不齊、以致日形萎頓。今歳重新創建會館、諸事整頓、亦是同業董事諸君一片苦心。今三月有徐潔笙司馬、擬連年糸業之虧損、皆由搶新買売、客不齊心所致。故擬今年發信湖属各糸業諸同行、概俟小滿十日後開市、俾得鄉客出售、糸市准繩價目与市情相合、買売均可把握。……惟菱鎮稍有不妥、未得舉行。必為菱湖鎮小領頭即小主人梭說。若各糸行只圖買売、並再任小領頭作主、不急為整頓市情……

開港により生糸貿易が開始されると、産地から生糸を仕入れて、多くの商人が上海に集ってきた。中でも浙江省の湖州人・嘉興人・杭州人が一大グループを形成するようになった。彼らの同郷・同業団体＝杭嘉湖糸業会

館の再結成は、買付者間の競争の抑制を主要な動機にしていた。この間の経営の悪化に糸業会館が危機感を強め、それを改善しようとしてこれまでばらばらだった開業日を統一するなどの方策を湖州各地の生糸取引商に向かって提起するようになった。

糸業会館の再結成の目的は、具体的には買付開始日の統一や後で述べる価格の一致に現れる同業者間の協調的な生糸の買付の実現にあった。しかし、この糸業会館の意図は、必ずしも十分な効果をあげなかった。史料からも分かるように、開業日協定は小領頭などの仲介者の強い反発と抵抗を招き、菱湖鎮では撤回に追い込まれてしまった。買付開始日を導入した地方の場合、たとえば1886年の南京の新糸買付について、

新糸將次登場。首事議定五月初一日開秤。……本年城南糸行、自膺福街沙湾至湖南会館、共四十二戸。自釣魚台至新橋、共十六戸。城北北門橋亦有十九戸。其中有帖者只三分之一。膺福街王某、每遇新糸上市、即租帖分莊、任情兜攬。同業畏其狼戾、皆不之較。今歲四月下旬、王租得吳姓長忻德記招牌、首先買糸二十二兩。同業察出、議罰酒宴兩席。王以首事未經通知為辭。首事初以王某無帖、不在議中。至是只得任過受罰<sup>29)</sup>。

とあるように、協定開業日は確実に守られているわけではなかった。

開業日協定は、競争買の防止を目指して行われたものであるが、実際には買付者間の競争は防ぎ切れなかった。その原因として第一に指摘できるのは、内地の生糸取引商の同業団体である糸業公所に未加入な業者の存在だった。非会員同業者の存在は、一つには同業公所に加入しない私設糸行が存在していたことによる。彼らは産地に店舗を構えて、養蚕農民または仲買人から生糸を購入し、客商へ売却する比較的大きな商人である。この史料にもあるように、「首事初以王某無帖、不在議中」、すなわち国家から牙帖を頒給されずに仲介業務を営む者は、公所の業規協定には参加しておらず、したがって生糸取引に関する協定にも拘束されなかった。というのは糸業公所は取扱生糸量を基準にして各糸行が負担する経費によって維持

されており、国家から牙帖の頒布を受けている正式の糸行しか構成員として扱っていなかったからである。この点を南京の糸行についてみると、史料に記載されている77店のうち牙帖を頒給されているのはわずかに三分之一、つまり、開業日の規制をもってしても、ついに糸行の三分之一しか拘束しきれなかったのである。

非会員同業者が存在した理由は、ここに引用した史料のいうところに加えて、もう一点があった。それは養蚕農民の庭先を回って少量の生糸を購入して直ちに織物業者またはより大きな商人へ売りさばく、当時俗に「販子」などの名称で呼ばれる小商人が活動していたことである。そして公所の業規に束縛されずに商業秩序を乱していたのは、このように投機的に参入した極零細業者だったのである。

業規による同業規制の限界として、第二に指摘できるのは、糸業公所の規制力の実効性如何の問題である。確かに、糸業公所は業規違反者に対して制裁措置を設定していた。しかし、南京の事例が示すように、それはあくまでも罰として酒肴を並べさせられるという程度で、王某が度々協定開業日より前に買付けを始めたこと自体、業規違反の横行を制御できなかった事実を直接反映するものであった。

養蚕農民に共同で対処するために、糸業公所では早くから生糸の買付最高価格を協定していた。1878年6月6日付けの『申報』は、「糸価難定」と題して、次のように蘇州糸業公所での買付開始日価格の制定過程を伝えている。

十一日、蘇郡各糸行開秤。先一日、同行議価。以本年各處陳糸價格昂貴。所出新糸繁旺、又倍他年。若開秤時定盤過小、則鄉人挾糸不售、既恐市面零落。如其定盤過大、又慮新糸堆積、銷路不通、必致跌價折本。是以同行再三議酌、至十二日、以每百兩作英洋二十四元開價。是日貿易者、蜂屯蟻集、應接不暇。自辰至午、價已跌至十八元云。

豊作であるにもかかわらず糸業公所が協定価格の維持に苦心し、しかも協定価格が実際の市場価格より高かった点が注目されよう。こうしたこと的基础にあるのは、農民の販売手控えであった。農民の不売は、糸行側に対

して買付実現量の確保の困難性という問題をもたらすことになる。ここからも分かるように、農民の販売手控えは糸業公所での価格協定に大きく影響した。

こうして糸業公所によって上限が決定された糸価については、次のようにいわれている。

杭城向來開秤十日内、市価或起或落、即早晚亦不能同価。故郷人均懷觀望之意、每多藏糸以待、不肯立時出售。各糸行雖已定価開収、而所収之糸、実属有限。必俟十日以後、市価方有定盤。各郷之糸亦遂紛至沓來、俛有自早至晚未經糸行開看、須次日再售者。今已議定新章。開秤定価統歸劃一。不准彼此歧異、任意兜攬、暗中伸縮。清晨開価後、当日収価不准増減、以致早晚不同<sup>30)</sup>。

協定価格があったにもかかわらず一日の中でも何度も変動してほとんど機能しなかったこと、養蚕農民が糸価の引き上げを意図して売り控えていたこと、高値での押し売りで生糸の買付に当たって品質を十分に吟味する余裕がなかったこと、そのため当日の相場変動を禁止するという協定が新たに制定されていたことが述べられている。もちろん、こうした新策も大きな限界を持つもので、例えば1897年の新糸の買付について、「杭州の開市は旧暦五月三日にして相場は初め糸業公所において両あたり二百六十文と協議したにもかかわらず、養蚕農民の手控えの結果、同日中既に二百七十五文に騰貴した<sup>31)</sup>」といわれていたように、協定糸価は確実に守られているわけではなかった。

以上、さまざまな方策によって、糸業公所が買付者間の競争を抑え、糸価の引き下げを図ったこと、そしてそれが必ずしも十分な効果をあげなかったことを明らかにしてきた。その原因の一つは販売手控え等の様々な形態での養蚕農民の側の抵抗であった。

### 3 糸行と養蚕農民

養蚕農民が商人・地主、そして高利貸などに操作されており、養蚕農民側に糸行との対等な取引関係がなかったことは、多くの論者が繰り返し論じてきたところである。確かに、当時の史料は商業や商人についてほとんど語っていないが、たとえわずかでも記録の対象となっているのは、人目を引く悪徳商人の事例であり、たとえば同治『長興県志』巻8、蚕桑には、

秤手口蜜腹劍、狡獪百出。遇誠實鄉民、糸每以重報輕、価每以昂報低。俟其不售出門時、又倍其価以偽許之、以杜其他処成交。俗謂進門一鎚、出門一掃。鎚言悶頭打倒、帚言掃絕去路也。貧家男婦廢寢忘餐、育蚕成糸、其苦不可言状。一歲賦稅租債衣食日用、皆取給焉。雖善価而沽、猶虞不足。而市遂及百般侮弄之。是可忍也、孰不可忍也。長俗名売糸者曰糸鬼、洵然。

と、長興県の糸行が生糸を廉価で買い叩くため、生産者より「糸鬼」と呼ばれて憎悪されていたことが伝えられている。

しかしながら、かかる記述から、養蚕農民側の抵抗の可能性が全く否定されたと判断するのは、やや早計である。長興の史料は、先に引用した箇所の前で、

按長地向多糸行。城市郷鎮、不下数百家。近日行家甚少、通邑不過十余家。故郷人售糸、往往至南潯等処。售於本郷者、不過十之二三。市上生意為之大減。

と、生産者が在地の糸行ではなく、糸行が密集する南潯に行って販売を行うようになったこと、その結果長興の市況が停滞するという事態が発生したことも述べている。つまり、生糸の生産農民は特定の糸市に生糸を持ち込むことを強制されているわけではなく、生糸を持ち込んだ糸市の買付価格に不満であれば、近接している別の糸市に行ってしまうのである。糸行に対しても同様であり、価格が折り合わず交渉が成立しなければ、他の糸行に行って売却することも可能であった。農民と糸行の間には、後者が前者の取引先の自由な選択を拘束するような関係は、存在しなかったので

ある。

すでに取り上げたように、養蚕農民は買付価格が一定の水準に到達するまでは生糸を売らないという方法で、糸行側に抵抗した。もともと養蚕農家は春繭・夏繭の二回に分けて繰糸するのであるが、自家織物用のほかは市場に搬入するものの、その繰糸ごとにあるいは物品の購買需要があるごとに、貯蔵分を切り崩して売却するのであって、一時に売却し尽くすことはほとんどなかったのである。しかも彼らは生糸のみを生産しているのではなく、農業などと兼営しているのが常であり、生糸売却収入に全面的に依存した農家はまれであった。「彼等ハ大ニ投機的営利心ヲ有シ、一時ニ収糸量ノ全部ヲ市場ニ持ち出す事ヲナサズ、時ニ相場ノ暴騰ヲ僥倖セントスルモノナリ」<sup>32)</sup>と記述されているように、養蚕農民は自前の市況判断に基づいて生糸を少量ずつ現金で売却する存在であった。市場対応能力の大きい農民は売り急がないのであって、生糸相場下落の時には売り控えて生糸相場の上昇を待つことができる。極零細経営農家の場合については、貧窮販売を強いられていた農民という観念を必ずしも否定できないが、「売主因価太賤、均不愿出售。有急需者、毎入長生庫。俟価長、再行贖出脱售」<sup>33)</sup>とあるように、一般には、生糸を質に入れることによって、糸価引き上げのために積極的に抵抗していた。ここでは、生糸の質入れは利益の追求を考慮した上で個々の農民が主体的に選択した商業行動の一つであり、一概にこれを高利貸資本の収奪と見なすことは誤りであろう。

さて、質屋によって没収された生糸がどのようになされたかについて、本稿が対象とする時期に関してはほとんど知ることができないが、20世紀初の時点に関しては、ややその実態を窺わせるに足る史料がある。1926年3月21日付けの新聞『新盛沢』には、次のような主旨の記事がある。生糸に携っている機戸（織物業者）を見つけ糸業公所の調査員が尋問したところ、その生糸は質屋から買ったもので、糸捐を納めておらず、糸業公所が会議を開き、質屋の責任を問おうとしたが、会議に参加する糸業公所の代表の言葉を借りれば、質屋が没収した生糸を機戸に販売するのは当然のこ

とであったという。質屋によって没収された生糸が直接機戸に売却されるのは、典業公所の代表にとって常態と考えられたことが分かる。このように養蚕農民に対する利害においては、糸行と質屋とは、必ずしも一体となっていなかったのである。

ところで糸行と養蚕農民の関係について、次のように述べている史料がある。

郷人入城売糸、有接貨者為之赴行代售。或論值包銷、取成贏余。或上市代売、取其酬勞。其人伺立於閩門城内、遇鄉人之負糸者、迎侯道旁、与之接談。郷人每恐行夥之上下其手、故皆愿听接貨者之所為……有某甲負糸一百余兩、行至中市。有接貨者、迎謂曰、今日貨価滞鈍、当与君私售於某機戸、偷免捐厘、則可多得一二元<sup>34)</sup>。

ここに言及されているのは、仲介者に糸行への販売を委託する、あるいは仲介者を通して機戸に直接販売する養蚕農家の姿である。つまり、そうした取引形態は、養蚕農民の立場から見た場合には、取引条件の改善を意味したのである。さらにこの史料は、もう一つの重要な問題を明らかにしている。それは糸行と仲介者の関係にかかわる。糸行に従属する勢力とみなされてきたこれらの仲介者は、養蚕農家と糸行との間を仲介し、かつ農家の依頼を受けて生糸を糸行に売り込むもので、それゆえに仲介者が仲介斡旋業務のみに奔走するにとどまらず、仲買も行っていたのであるから、仲介者と糸行は相対立する利害関係にも立っている。こうした仲介者たちを単に糸行に従属する勢力とみなすことはできず、彼らは糸行と絶えざる緊張関係にあったのである。開業日協定が菱湖鎮では仲介者の反発によって頓挫したことは、先にも述べたとおりである。

糸産地の市況が開港場上海の相場に左右され、また上海の相場がロンドン等のそれに従属しており、養蚕農民の側に価格形成力がなかったと、多くの論者が繰り返し論じてきた。だが、養蚕農民側においても、そこに固有の条件を生かした反抗の契機が存在したことを見失うべきではない。前にも述べたように、細糸と粗糸の関係のような生糸種類の選択においても、

また生糸と繭の選択においても<sup>35)</sup>、市況の最も有利とするものを選ぶだけの自立性を彼らは有していた。商人独自の組織がないまま、彼ら原料供給者と対応しなければならないところに、中国生糸商人の困難があった。

## おわりに

1870年代後半以降、江浙在来糸は、世界生糸市場において、もはやかつてのような売り手優位の状況を維持できず、その輸出価格は世界市況に従い下落・停滞した。かつて「冒険的投機商」に活躍の舞台を用意し、生糸買付の全盛期を現出した高糸価時代が終わった。高糸価時代の終息、そして電信・新聞の普及に伴う情報の公開が、流通過程の利潤を圧迫してその合理化を迫ったのである。内地の糸業公所は所属糸行の間で買付の開始日や価格などを協定し、買付価格の上昇を阻止しようとしていた。しかし、同業公所に所属せず生糸の取引にあたる零細業者が多数存在し、それが業規違反の温床にもなっていた。伝統的同業社会の非閉鎖的・非固定的な性格が、公所業規を実施する上での大きな障害として立ちはだかっていたのである。加えて、市況に敏感な養蚕農民の側の様々な抵抗も、糸業公所の買付価格の抑制を困難にしていた。

開港以後も移動商人と仲介者を基軸とする流通機構には変化がなかった。たしかに、輸出生糸は養蚕農民－糸行－糸棧という経路を辿って流通していた。こうした各流通機構が階層をなしていることは、一般には誤解を招きやすい。つまり、上層の流通機構から下層のそれへの間の垂直方向の損失転換が、摩擦なしに円滑になされると見なされがちである。本稿が示したように、生糸の流通機構は構造的に組織化されておらず、そのためこの間の損失転換は決して円滑にいくものではなかった。このことは、開港場から内地への経済的支配の内なる限界をも形成したのである。

このように、1870年代以降も、中国の流通機構は伝統的な非組織的性格をかなり維持しており、それが世界市場への包摂を開港場のみに限定し、内地市場の掌握を阻んでいたのである。この状態が何時・いかなる契機で



変革されるのかについては、別稿を期したい。

(注)

- 1) 宮田道昭「清末における外国貿易流通機構の一考察——ギルドの流通支配を中心として」(『駿台史学』第52号 1981年。のち『中国の開港と沿海市場——中国近代経済史に関する一視点』東方書店 2006年所収)、同「近代アジア間貿易と中国沿海市場圏」(『思想』810号 1991年)。1981年の論文に対し、1993年には聶宝璋氏が通説にも相応の根拠があり、宮田氏のいう流通機構の性格は認められないと主張して全面的な反論を行った(聶宝璋「論洋行買弁の本質特性—答日本学者宮田道昭」『近代中国』1993年第3輯)。
- 2) 呉承明「我国半植民地半封建市場」(『歴史研究』1984年2期)。こうした見方は、中国の主要な蚕糸業研究者の著作にも貫かれている。
- 3) 足立啓二『専制国家史論』(柏書房 1998年)、同『明清中国の経済構造』(汲古書院 2012年)。黒田明伸『中華帝国の構造と世界経済』(名古屋大学出版会 1994年)
- 4) 楊纓「五港開港と江浙生糸市場——19世紀中葉中国の世界市場への統合過程をめぐって——」(『東洋学報』85巻1号 2003年)
- 5) British Parliamentary Papers, China 11.“Commercial Reports on Shanghai 1874”pp.442～443。『申報』1874年7月23日「西人述糸市情形」
- 6) 1882年フランス恐慌時のリヨン絹織物業については、中林真幸「製糸資本の勃興」『土地制度史学』第150号(1996年1月) 25頁
- 7) 鈴木智夫『洋務運動の研究』(汲古書院 1992年) 296頁
- 8) 陳雲笙『慎節齋文存』巻上 “胡光墉”条。歐陽昱『見聞瑣録』後集 下巻 5～10頁。価格操作の方法は巨額な自己資金を使って地方商人から大量の生糸を買占めるという形をとった。つまり、価格操作は、生糸商人としての同業性に依拠し、商人組織の上になって展開されたというよりは、胡光墉の個人的資源に依存して成り立っていたのであった。
- 9) 『申報』1884年3月5日「光緒十年正月二十二日京報全録」
- 10) 地域的には、湖州や蘇州・嘉興・杭州など伝統的な蚕業地と並んで、無錫・鎮江・溧陽など新興蚕業地がリストアップされている。表1で蘇州・杭州・鎮江などを中心として収集したのは、糸価資料が比較的豊富に得られるという理由からである。
- 11) 採買価格は市場価格ということではできないが、蘇州・杭州の織造が提出した奏摺には、「織造衙門需用糸斤、按照市価確實合計」(『上海新報』1870年11月10日)とある如く、何れも妥当な価格であることが強調されており、市場価格との間にそれ程の差はないと考えられるため、採用した。
- 12) 「清糸景況第十報」『通商彙纂』明治16年上半年
- 13) 「清糸景況第四報」『通商彙纂』明治16年上半年
- 14) 『申報』1883年6月22日「論本埠時景」
- 15) 「清糸景況第三報」『通商彙纂』明治16年上半年
- 16) Commercial Reports, 1886, Shanghai, p.4.
- 17) 徐新吾編『近代江南糸織工業史』上海人民出版社1991年 98頁

- 18) 実業部国際貿易局編『中国実業志』江蘇省 1931年 第8編
- 19) 「清国浙江省紹興蕭山地方情況視察報告」『通商彙纂』1897年 58号
- 20) 『申報』1880年6月21日「無錫糸盛」
- 21) The Maritime Customs. Special Series; Silk, p.62.
- 22) 嵇發根主編『絲綢之府湖州與絲綢文化』中国国際廣播出版社 1994年 157～61頁。湖州からの輸出量がわかるのは残念ながら1847年までと1880年からで、途中データを欠いている。ここからは、本稿が対象とする時期において巨大集散地の形成がほとんど見られず、中小の集散地が各地に分散して存在した、という生糸集散地のあり方を一応知ることができる。
- 23) 『申報』1892年6月8日「論中国商務之所以不振」  
夫電報之為用、凡報軍情伝警信、其用為至神也。而獨於商務既不甚相宜。數万里之外消息轉來、某貨缺而價驟長、爭相弃貨。比運至而來、貨已多、不得不貶價以售、此一弊也。
- 24) 『申報』1879年10月7日「糸業衆商啓」  
物稀為貴、物多必賤、此市價之恒情也。今年湖糸出新時、因聞外洋蚕信歉収、各客涌奔來申、以致買尽地頭、壅塞申浦、糸價日賤、無怪其然。近則糸價賤足、似有軋機各宜尽心待時、不可再蹈前轍。緩緩疎通、則吾業將來或有可為。如果再去湧奔前來、則前貨未消、後貨又到、仍有壅塞之虞。况吾業屢年受虧匪輕。前車可授、各宜慎之、特白。
- 25) 劉錦藻『先考通奉府君劉鏞年譜』光緒刻本
- 26) 『申報』1890年11月17日「浙西糸吐同業公啓」によれば、1890年頃、輸出向けに糸吐を仕入れる上海の商人は、産地の糸吐行と特約取引を試みようとしていたが、採用されることはなかった。
- 27) 其專買郷糸、載往上海与夷商交易者、曰糸行。別有小行、買之以餉大行及買糸客人者、曰鈔莊。更有招郷糸代為之售、稍抽微利、曰小領頭、俗呼白拉主人、鎮人大半衣食於此。
- 28) 東亞同文会『支那經濟全書』12輯 101頁
- 29) 『申報』1886年6月26日「金陵糸市詳述」
- 30) 『申報』1889年5月30日「杭糸開秤」
- 31) 『申報』1897年6月7日「杭城糸価」
- 32) 大石善四郎『清国江蘇・浙江兩省繭生糸調査報告』東京高等商業学校 1905年 26頁
- 33) 『申報』1884年6月12日「嘉興糸市」。同様の例は『申報』に数多く見出され、生糸の質入れはかなりの広がりを持つ商行為だったと言える。
- 34) 『申報』1887年7月10日「糸市談資」
- 35) 1880年代以降の上海の器械製糸業のための原料繭生産が発生・普及し、その中において、生糸の買付価格が低下すると、製糸を放棄して繭の販売にはしる農民も出現した。